

コリント人への手紙第二7章10節 「後悔のない悔い改め」

1A みこころに添った悲しみ

1B 罪に対する悲しみ

2B 神から引き離された悲しみ

3B 悔い改め(思い直し)

2A 後悔のない悲しみ

1B サウルとダビデ

3B ユダとペテロ

3A 救いに至る悔い改め

1B 神の豊かな憐れみ

2B 罪の赦し

3B 救いの喜び

4A 世の悲しみ

1B 罪からの死

2B 世の滅び

本文

コリント人への手紙第二 7 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びが 6 章まで来ましたが、午後礼拝で一節ずつの学びをしていきます。今朝は 7 章 10 節に注目します。「**神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。**」

7 章に入りますと、パウロがマケドニアでテスと会うことができたことが書かれています。彼は、自分が前の手紙で書いたことに、コリントの人たちがどう反応しているのかが気が気でならなかったのです。覚えていますか、コリントには性的な乱れの問題がありました。具体的に、近親相姦を行っている男がいました。パウロがテモテに手紙を託して、その問題に対処するように教えたのですが、問題はさらに大きくなっていました。それで、彼は直接、エペソから船に乗ってコリントに行ったようです。そこで厳しい処置を行いました。そして、戻ってから今度はテスに手紙を託して、厳しい処置をするように指示する内容を書いたと思われます。そしてパウロは、テスからコリントの人々の反応を聞いたのです。すると、多くの人が悔い改めたことを聞いたのです。それで彼の心は慰められ、喜びに満たされました。

それで、この言葉を語ったのです。「神のみこころに添った悲しみをあなたがたは抱いた。これは、悔い改めに至る悲しみで、後悔を残さず、救いをもたらしたのです。それで私は喜んでいます。神

に添った悲しみではなく、世の悲しみであればそれは死をもたらします、ということです。」ここを読めば、後悔と悔い改めは似てるようでまるで違うことがわかりますね。いや、後悔と悔い改めは、実は正反対の行為であることがわかります。後悔は死をもたらします。悔い改めは救いをもたらします。これだけの違いがあります。多くの人が、反省することが悔い改めだと思っています。また、後悔することも悔い改めだと思っています。しかし、悔い改めは、単なる反省でもなく、ましてや悔い改めではありません。もっともっと前向きなものです。

一般の人が書いた記事に、興味深いことに「後悔と悔い改めの違い」というものがありました。

「後悔は自分の過去の行動や行動について継続的に考えるようになり、より多くの恥、罪悪感、怒り、失望などを引き起こすため、否定的な感情である反省の感情です。一方、悔い改めは、自分の過ちについて学び、将来それを繰り返さないことを誓うポジティブな感情です。」¹

後悔は、後ろを向いている、過去を向いていると言えるでしょう。悔い改めは、向きを変えて、前を見ているということです。後ろも見るのですが、それはへりくだるためであり、前を向いて歩くためです。10 節から、後悔の残らない、救いに至る悔い改めについて学んでいきます。

1A みこころに添った悲しみ

初めにパウロは、「**神のみこころに添った悲しみ**」と言っています。ここのギリシア語には、「みこころ」はなく、「神に添った悲しみ」となっています。主ご自身の思いに添った悲しみ、主ご自身に対する悲しみと言い換えたらいよいでしょう。これが、この世における悲しみと大きく異なるものです。

1B 罪に対する悲しみ

私たちが交読文で読みました、詩篇 32 篇は、ダビデが罪を犯して、その後で告白した時に与えられた罪の赦しを歌ったものと言われています。ダビデの思いがそこに克明に記されています。「32:5 私は自分の罪をあなたに知らせ自分の咎を隠しませんでした。私は言いました。「私の背きを【主】に告白しよう」と。するとあなたは私の罪のとがめを赦してくださいました。」ダビデは、バテ・シェバとの姦淫の罪を犯しました。その罪を隠すために、バテ・シェバの夫ウリヤを殺すという罪を犯しました。彼は、この罪がすべて主に対するものであり、主の前で犯した罪であることを、強く意識しています。「自分の罪をあなたに知らせ自分の咎を隠しませんでした。」と言っています。同じように、詩篇 51 篇でも、「私はあなたに、ただあなたの前に罪ある者です。私はあなたの目に、悪であることを行いました。(4 節)」と言いました。何をもって悲しんでいるのか？が大事です。主に対して罪を犯したことに対する、悲しみです。

¹ <https://ja.strephonsays.com/regret-and-vs-repentance-15330>

これが、神に添った悲しみということです。世においては、いろいろな悲しみがあります。自分のしたことに対して、自分に向かって悲しむことが多いですね。自分が不利益を被っているから悲しんでいるだけで、自己中心的です。または、他の人々に加害行為をした人は、被害を受けた人々のことを思って悲しみます。これは良いことで正しいことですが、それだけでは足りません。なぜなら、自分が害を加えた人々は、神によって置かれている人々であり、神に造られた人々であり、ゆえに神に対して犯した罪なのです。自分がした行為によって、神の秩序が壊され、神の栄光がそこで見えなくなっている。神の正義や平和が壊されている。このことに対する悲しみなのです。

しばしば、自分のからだに対して犯している罪については、人に迷惑をかけていないからいいのだとします。いいえ、しっかりと迷惑をかけています。愛している人が、例えば麻薬でずたずたになっている姿を見て、悲しまないでいられるでしょうか？しかし、何よりも神が自分のからだを造られたのですから、それを悲しむべきなのです。これが、真の悔い改めへと導かれます。

2B 神から引き離された悲しみ

そして、自分が神に罪を犯したために、神から引き離されたことに対する悲しみも、この悲しみに含まれます。ダビデは、詩篇 32 篇で、自分が乾ききったことについて述懐しています。「32:3-4 私が黙っていたとき私の骨は疲れきり私は一日中うめきました。4 昼も夜も御手が私の上に重くのしかかり骨の髄さえ夏の日照りで乾ききったからです。」聖書には、神のいのちにあずかっていることは、泉によって生かされていることとして表現されています。イエス様は、サマリアの女に「ヨハ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渇くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。」と言われました。そのいのちから離れているのは、逆に干からびた状態です。

イエス様は、十字架の上で「ヨハ 19:28 わたしは渇く」と言われました。それは、十字架上で脱水症状になっているからだけでなく、世の罪を、私たちの罪をご自身の上に背負っておられたからです。ダビデが先ほど話した、自分の内に罪を隠しておいたら干からびてしまったと言い表した、その渇きをご自身が抱かれていたからです。それゆえ、「マルコ 15:34 わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と、詩篇 22 篇にある言葉を十字架の上で語られたのです。罪によって神から引き離され、見捨てられたようになっておられるゆえに、渇きを覚えられました。

3B 悔い改め(思い直し)

こうした渇きを覚え、神に対して罪を犯したと知った人が、神に添った悲しみを抱いていると言えます。このように悲しむ時に、悔い改めへと導かれます。放蕩息子が、悔い改めを見る時に分かり易いです。彼が豚のえさを食べたいと思うほど空腹でした。彼は、父から離れていることによってこうなっていることを悟りました。そして、天に対して罪を犯し、父の前でも罪ある者であると言おうと思いました。それで父のところに向かうのです。自分は息子と呼ばれる資格はない、雇い人のひ

とりのようにしてくださいと言います。父のところから離れていたところで、思い直し、父のもとに帰る。これが悔い改めです。悔い改めの意味は、思い直すことです。

後悔には、思い直すことはありません。犯してしまった罪のことは思っているかもしれませんが、思い直していません。そのままの自分、過去の罪をそのまま思っている自分しかいません。反省であっても同じです。今の自分のことはいろいろ思っているでしょう。一生懸命、悔いるでしょう。けれども思い直していないのです。私が、アメリカで学んでいる時に、聖書を使ったカウンセリングの授業がありました。先生はみなに、「白い象を思い浮かべてください」と言いました。その後で、「白い象を消してください」と言いました。思いから消すことのできる人と、そうでない人たちがいました。消すことのできる人は、白い象の代わりに、紫色の象とか、色の違う象を思い浮かべた人たちです。白い象のことを思っている、思い直していません。紫色の象を思うということは、思い直しているのです。これが、悔い改めるといって、主のほうを見て、立ち返ることです。

ヤコブは、そういった悲しみを抱きなさいと勧めます。「ヤコブ 4:9-10 嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」

2A 後悔のない悲しみ

この「後悔のない」悔い改めについて、二組の人たちのことを思い出してください。一つは、サウルとダビデです。もう一つは、イスカリオテのユダとペテロです。

1B サウルとダビデ

サウルは、神に王として立てられたものの、後で王位を退けられました。アマレク人と戦い、すべてのものを聖絶しなさいと神は命じられました。けれどもサウルは、王アガグを生け捕りにして、最良の家畜は惜しみました。主の御声に聞き従わず、それで王位を退けられました。彼は口では、罪を犯しましたと言っていますが、動機が違います。「Iサム 15:25 どうか今、私の罪を見逃してください。そして、私が【主】を礼拝することができるように、一緒に帰ってください。」彼は、主を礼拝しているという体裁にしがみついていた。後悔はしていますが、主の御声に聞き従わないという不従順には無頓着だったのです。

それに対して、ダビデが、バテ・シェバとの姦淫の罪、ウリヤを殺した罪について、彼は主に対して罪を犯したことを悲しんでいました。その後で、自分の家に剣が離れないと宣言されても、それに抵抗しませんでした。ダビデの家は荒れに荒れました。息子アブサロムは、クーデターさえ起こしたのです。それらに対して、厳しく対処しましたが、しかし、主から来ていること、主のお許しの中で起こっていることだと認めていたのです。

3B ユダとペテロ

もう一組、イスカリオテのユダとペテロですが、どちらも主イエスに対して罪を犯しました。ユダは裏切り、ペテロは主を、三回知らないと言ったことです。しかし、その後の行動は大きく違いました。

ユダは、イエス様を売ったことを後悔しました。「マタ 27:4-5 「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」しかし、彼らは言った。「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」5 そこで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして出て行って首をつった。」ユダは、イエス様について、「無実の人」と言っています。そこには、すでに自分の主であるという関係はありません。元々、なかったのでしょう。それで、自分に絶望し、首をつって自殺しました。ここも、自分のうちで完結してしまっています。

しかし、ペテロは違いました。彼が、主を三回否んだ後に、鶏が泣きました。「ルカ 22:61-62 主は振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、「今日、鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われた主のことばを思い出した。そして、外に出て行って、激しく泣いた。」主を愛していたのに、この方を知らないと言ったことに激しく泣きました。主が、ペテロをその時に見つめられています。それは、彼に対する慈しみの思いからでしょう。彼がとてつもない試練を受ける、信仰が試されると思われたからでしょう。ペテロは、激しく泣きます。けれども、主がよみがえられた時に、ペテロはその話を聞いて一目散に墓に走っていきました。そして主ご自身に会っています。ペテロは、もっぱら主ご自身に心が向かっています。

3A 救いに至る悔い改め

そして、「**救いに至る悔い改め**」と言いました。悔い改めは、必ず、神の救いへと導かれます。

1B 神の豊かな憐れみ

それは、神ご自身が憐れみ豊かな方だからです。「イザ 55:7 悪しき者は自分の道を、不法者は自分のはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださるから。」主は憐れんでくださる方なのです。だから、主に立ち返るならば、つまり、悔い改めるならばすぐにでも主は赦して下さいます。エゼキエル書においても、主が、どんな悪者でも生きることを望んでおられることが書いてあります。「エゼ 18:23 わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——【神】である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。」

2B 罪の赦し

使徒ペテロも説教をしました。聖霊が降り注いだ後の初めての説教で、聞いていたユダヤ人たちは心刺されました。それで彼は勧めました。「使 2:38 それぞれ罪を赦していただくために、悔い改めて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けま

す。」悔い改めることによって、罪の赦しが与えられます。悔い改めなかったら罪が赦されないということではありません。主は憐れみ豊かで、いつでも罪の赦しを備えておられます。しかし、それを受け取るべく、主のほうに向かなければ、自分のものとすることができないのです。

3B 救いの喜び

そこで、悔い改めには、悔いの残さない救いの喜びがあるのです。主の憐れみに触れます。すべての罪が清められ、赦されます。だから、主の救いにあずかり、それで喜びに満たされるのです。「I ペテ 1:8-9 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。9 あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。」

4A 世の悲しみ

こうして、神に添った悲しみが、いかに後悔を残さず、救いに至る悔い改めをもたらすかがお分かりになったと思います。それでは、「**世の悲しみは死をもたらします。**」という言葉を考えてみたいと思います。

1B 罪からの死

みこころに添う悲しみが、罪に対する悲しみであれば、世の悲しみとは、罪からの悔い改めがない悲しみと言えるでしょう。先ほど見た、イスカリオテのユダがそうです。自分のしたことに対する悲しみはありますが、主イエスのほうに行かないという問題がありました。それで、自分のしたこと、その罪の重さに押しつぶされて、死に至ったのです。サウルのことも話しましたが、彼はいつまでも主の御声に従わず、最後は、なんと霊媒師のところに行って声を聞こうとしました。ペリシテ人によって殺されることを告げられるのですが、彼も果たして、自害して死んでいきました。ここにも、主のほうを見るという悔い改めがありませんでした。それで罪がそのまま残ってしまっ、その中で押しつぶされて死んでしまいます。これが、世の悲しみです。

2B 世の滅び

そして、世の悲しみは、世に対する愛があると、悲しみます。「2:17 世と、世の欲は過ぎ去ります。しかし、神のみこころを行う者は永遠に生き続けます。」と使徒ヨハネが第一の手紙で言いました。したがって、世を愛しているならば、世とその欲が過ぎ去った時に、自分自身も失ってしまう、滅んでしまうのです。

このことが、終わりの日に起こることを、黙示録が描いています。世の終わりに、「大きな都バビロン」が、一日のうちに崩れ去る幻があります。そこに極度の富が集まっています。それで、関わっている人たちが、泣きわめいている人々が出てきます。「黙 18:9-10 彼女と淫らなことを行い、ぜいたくをした地の王たちは、彼女が焼かれる煙を見ると、彼女のことで泣いて胸を打ちたたく。10

彼らは遠く離れて立ち、彼女の苦しみに恐れをなして、「わざわいだ、わざわいだ、大きな都、力強い都バビロンよ。あなたのさばきは一瞬にしてなされた」と言う。」地の商人たちも、同じように、泣き悲しみます。船舶の人々も嘆き悲しみます。なぜなら、富が自分のアイデンティティー、一部になっていたからです。富が過ぎ去れば、自分もいなくなってしまう。これが、世の愛を持っている人々の姿です。

イエス様が言われましたね、悲しむ者は幸いです、と。その人は慰められます。けれども、今、笑っている人は災いですとも言われました。これから泣くから、ということです。それは、罪に対して悲しみを覚えている人は、後悔のない、救いに至る悔い改めに導かれるからであり、笑っている人が災いなのは、世と世の欲がこれからなくなり、それで死に至る悲しみに陥るからです。主のみこころを行う者が、永らえます。